

現地の人とコミュニケーションを取る場を設定した活動・実践

前ミラノ日本人学校教諭

新潟県長岡市立川崎小学校教諭 稲葉 謙太郎

キーワード：現地理解、コミュニケーション

1. はじめに

私が勤務していたミラノ日本人学校は、イタリアのロンバルディア州に所在する学校である。昭和51（1976年）2月25日に設立され、2019年で44年目を迎えた。開校当時は、幼稚園13名、小学生83名、中学生4名の8学級でのスタートとなったが、途中から小学部と中学部のみとなり、現在に至る。開校後、児童生徒数は増え続けたが、1990年代前半には200名に達していた児童生徒数も次第に減り、現在では、半数以下の約80名の児童生徒が在籍している。

その中で、ミラノ日本人学校は、さまざまな魅力ある学校づくりに取り組んでいる。その1つは、現地の文化を教材として積極的に扱った学習活動である。イタリアには、カフェやファッションなどの独自の文化がある。それらを教材として様々な教科で扱い、イタリア文化に興味関心をもたせようとする活動を行っている。

また、小学部では、全学年とも1年間に2回、ミラノの現地校との交歓会を行っている。この活動は、日本の児童とミラノの児童がイタリア語を使って、お互いの文化を紹介したり、親交を深めたりすることをねらいとしている。

このような活動を通して、外国で生活する日本人学校の児童が、イタリアの文化を理解することができるように努めている。派遣されて1年、このような日本人学校の教育活動を経験した私は、国際理解教育の視点に立った指導として、次のことを反省点として感じている。

・児童が、現地の人に質問したい・現地の人に伝えたいという思いがあっても、児童と現地の人とのコミュニケーションを取る活動を設定することができなかった。

そこで、上記の反省を踏まえ、普段の学習の中で現地の人とコミュニケーションを取る機会を取り入れることが大切であると考えた。しかし、児童のほとんどは十分にイタリア語を話すことができない。そのような児童に現地の人とコミュニケーションを取る機会を増やしていくには、まずはイタリア語で話しかける経験を増やしていくことが必要である。そのため、ミラノ日本人学校のイタリア人の職員と連携を図りながら、次のような活動を組んでいくことにした。

①児童が現地の人に聞いてみたいことや話してみたいことを日本語で書く。→②職員で児童の書いた日本語の文をイタリア語の文に書き換える。→③イタリア人の職員と協力し、イタリア語の会話を練習する。→④実際に現地の人と会話をする。

上記の活動を通して、現地の人とコミュニケーションを積極的に取る態度を養い、外国で生活する児童によりたくましく生きる力を育むことができると考えて、活動を設定し実践を行った。

2. 研究の実際

(1) 小学部3年 社会 「店ではたらく人」

小学部3年生では、毎年地元のスーパーマーケットである「カルフル」への見学を通して、お店で働く人の努力や工夫を調べている。今回は、その調べ活動の中にインタビューをする時間を設けて活動を行っていく。児童が考えた質問をもとに、事前にイタリア人の職員とインタビューの練習をすることを通して、現地のお客さんやお店の方とコミュニケーションを図る活動を取り入れた学習を行った。

単元名	時間	学 習 活 動
店ではたらく人	1	スーパーマーケット「カルフル」がよく利用されている理由を考えよう
	2	日本のスーパーマーケットの様子で気づいたことをまとめる (1)
	3	日本のスーパーマーケットの様子で気づいたことをまとめる (2)
	4	日本のスーパーマーケットのよいところをまとめよう
	5	ミラノのスーパーマーケットで調べることを決めよう
	6	ミラノのスーパーマーケットに来るお客さんにインタビューする練習をしよう
	7	ミラノのスーパーマーケットを見学しよう (1)
	8	ミラノのスーパーマーケットを見学しよう (2)
	9	ミラノのスーパーマーケットを見学しよう (3)
	10	ミラノのスーパーマーケットを見学しよう (4)
	11	ミラノのスーパーマーケットで見学したことをまとめようミラノのスーパーマーケット
	12	トで見学したことをまとめよう
	13	日本とミラノのスーパーマーケットの違いをまとめよう まとめ

6時間：ミラノのスーパーマーケットに来るお客さんにインタビューする練習をしよう

これまでの学習を通して、「お店はどんな工夫をしているのか」「お客さんはなぜカルフルに来ているのか」などについて質問を考えている。そこで、これらの疑問を解決するために、インタビュー活動を行うことを伝えた児童は、イタリア人の職員の指導の下、事前にイタリア語文に直しておいた質問文をもとに、班ごとに分かれてインタビューの練習を行ったインタビューをスムーズに行えるようになってきたところで、他の職員にも協力してもらい、実際にインタビューをしてみた。児童は恥ずかしがる様子を見せる場面もあったが、イタリア人の職員と繰り返し練習してきたことで、自分の質問をしっかりと相手に伝えることができた。

7～10時間：ミラノのスーパーマーケットを見学しよう

スーパーマーケットに行ったらすぐに利用客にインタビューを行った。「どこから来たのか」「どうやって来たのか」「なぜこのお店を選んでいるのか」をイタリア語で質問した。初めは緊張しながら質問する姿が見られた児童であるが、どのグループともインタビューを重ねることで、少しずつ自分達で進んで質問することができるようになった。どのお客さんも児童の質問に親切に答えてくださった。

お客さんの質問に対する答えの翻訳は職員で行った。しかし、児童は自分達の質問した内容の答えが気になり、何と言っているのかを聞き取



実際にインタビューする児童の様子

ろうと、自分たちなりに分かったことを伝え合う姿があり、積極的にインタビュー活動を行っていた。

(2) 小学部3年 総合 「おじいちゃん・おばあちゃんと仲良くなるろう」

イタリアの現地の小学校では、高齢者の方との交流活動はそこまで盛んではない。そこで、今回は初めて高齢者と交流することを目的として高齢者福祉施設に行くことを提案し、学習をスタートさせた。本単元では、2回の訪問を通して、活動を行った。1回目は、職員から活動案を提示し、概ね活動案に沿って学習を進めた。2回目は、1回目の様子から、高齢者とどのような関わり方をしていくことが望ましいのかを児童で考えさせながら、自分達にできることを考えさせていくことで、相手のことを考えて関わることの大切を実感させた。

単元名	時間	学 習 活 動
おじいちゃん・おばあちゃんと仲良くなるろう	1	老人ホームについて知ろう。
	2	年を取るとどのような体の変化が起こるのか。
	3	自分達が行く老人ホームには、どんなお年寄りの方がいるのか。
	4	おじいちゃん・おばあちゃんとの交流会の流れを知ろう。
	5～6	交流会に向けた準備をしよう。
	7	リハーサルをしよう。
	8～9	交流会をしよう。
	10	振り返りをしよう。
	11	2回目にしたいことを考えよう。
	12	老人ホームのスタッフと連絡を取っていた先生に自分達が考えたプログラムの感想を聞いてみよう。
	13～14	交流会に向けた準備をしよう。
	15	リハーサルをしよう。
	16～17	交流会をしよう。
	18	振り返りをしよう。

5～7 時間：交流会に向けた準備をしよう

高齢者の方に対する理解を深めた児童に、訪問する老人ホームにいる高齢者の方の様子や、当日のプログラムの話をした。プログラムの中には、折り紙・ちぎり絵・ボーリングの活動を取り入れた。これらの活動は、施設の方からの要望や、過去の資料から児童で運営しやすいものを職員側で選び、児童に紹介することにした。

児童は、イタリア語のセリフを何度も練習したり、簡単なジェスチャーを使ったりしながら、説明の練習を行った。イタリア語の職員からは、イタリア語の発音や高齢者と関わった経験から動き方の助言をしてもらった。児童の中には、自分で伝えたいセリフを考えたり、イタリア語の言い方を職員に聞いたりしながら、自分なりに説明しようと活動する姿が見られた。

8・9 時間：高齢者の方と交流しよう

実際にイタリアの老人ホームに行き、交流会を行った。児童に出会った高齢者の方々は、投げキスをしたり、抱きしめようとしていたりするなどして、熱烈な歓迎をしてくださった。児童はそれぞれの活動のブースに分かれて、イタリア語のセリフを言いながら一生懸命に説明する様子が見られた。児童の中には、実際に高齢者を相手に活動を進行しようとする、思い通りにいかず悩む場面も見られた。しかし、練習したセリフを何度も伝えたことで、高齢者の方に活動してもらうことができた。

活動を通して、児童は、高齢者一人ひとりの体の変化に違いがあることや、イタリア語を使って会話をすることの

楽しさや難しさを感じる事ができた。

ちぎり絵	ボーリング	折り紙
「私が想像していたより上手かったです」「おばあさんが作ることができなかったの、ぼくが作ってあげました。ありがとうと言われて嬉しかったです」「私が教えたおばあちゃんは、のりをつかむことができなくて、しゃべるのも苦手な耳も少ししか聞こえないのでほとんど作りました」	「10ピン倒す人もいてびっくりしました」「たくさんストライクが出て、おじいちゃんもおばあちゃんも楽しくできて嬉しかったです」	「折り紙をしている途中で、どこかに行ってしまうと教え方が悪かったのかと思いました」 「緊張したけれど、がんばって折り紙を作ってくれました」

16・17時間：高齢者の方と交流しよう（2回目）

1回目の交流会後、児童と2回目の交流に向けた相談をした。児童は、「新しい遊びでやってみよう」「もっと動きが少ない活動がよい」という意見を出し、2回目の交流は、風船バレーとビンゴを行うことにした。児童は、1回目と同様にイタリア人の職員からイタリア語を使った交流会の進め方を教えてもらい、2回目の交流会を行った。児童は練習したことをもとに、ゆっくりとセリフを言ったり、遊びの説明をしたりするなどの活動を精一杯行っていた。風船バレーとビンゴのどちらの活動とも、スタッフや高齢者の方が楽しんでくれていた。交流会後には、「楽しく活動できてよかった。また是非来てください」と声を掛けてもらえたことで達成感を得る活動となった。



風船バレーと一緒に楽しむ児童

ビンゴ	風船バレー
「イタリア人はビンゴをしたことがないのに、私達が説明をしたらすぐにビンゴをすることができてびっくりしました」 「おじいさん・おばあさんがビンゴをすると、元気な声で『ビンゴ』と言ってくれて嬉しかったです」 「一番にビンゴしたおばあちゃんがとても喜んでくれたので、嬉しかったです」	「隣のおばあちゃんが元気そうにボールを打っていてすごいなと思いました。ぼくもおじいちゃんになったらそんな風になりたいです」 「一緒に対決をして楽しかったです」 「自分達で考えたルールの通りにはいかなかったけれど、おじいちゃんもおばあちゃんも楽しんでくれたので良かったです」

3. 終わりに

日本人学校の児童と現地の人がコミュニケーションを取る活動は、児童が意欲的に相手と関わる上で有効であった。児童の中には、自分達なりに工夫してイタリア語を使おうとしたり、イタリア語での言い方を職員に聞いたりする姿が見られ、意欲的にイタリア語を話そうとしていた。しかし、イタリア語の文章を読むことや正しく発音すること、相手がイタリア語で言ったことを理解することなどは、児童にとっては難しいため、児童への外国語の指導や補助の体制を整えていくことが必要であると感じた。

また、児童と現地の人がコミュニケーションを取る場を設定するためには、職員同士や現地の人との連携が不可欠である。授業者の意図を正しく相手に伝え、ねらいに沿った活動ができるようにするためにも、職員の

語学力の向上は大切な要素であると感じた。